	前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、経年比較でどのように変化しているか（傾向、学科として望ましい値か等）			前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、全学の集計値と比較してどのような状況か。			入試区分ごとに、成績分布に傾向はあるか。課題に感じる部分があれば、学科として取り得る対策はあるか（例：入学前教育の工夫、入学後のサポート体制等）			改善・向上に向けた内部質保証推進会議からの指示
	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	
国文	2020年度前期から後期に、各項目評価が上昇した後、若干の隔年変動はあるが、ほぼ安定して4以上の評価を得ている。ただし、「難易度」については評価が下がる傾向にある。	「難易度」についての評価が低下傾向を見せている。毎年、前期の各評価が後期のそれと比して低い傾向が見られる。	各教員が、特に前期授業開始時のガイダンスをより丁寧・詳細に行い、受講への導きをさらに意識する。学生の学力低下傾向にあわせて、授業での解説をさらに工夫するよう意識を強く持つ。	各評価項目において、評価スコアが「全体」に比して目立って低いものはない。「全体」に比して高いのは「フィードバック」「シラバス理解 」の2項目であるが、0.17ポイントの差で、目立って高いものはない。	「開講学年」項目において、「全体」評価よりも0.02ポイント低くなっている。	学科のカリキュラムの中で、各授業の開講学年の適切性について、あらためて点検をする。	・「共通テスト」「一般前期」入学学生成績は、全学データと比べて若干高い傾向にあり、近年ほぼ安定している。 ・「総合型」入学学生成績は、2022年度入試入学学生で上昇したものの、2023年度入試入学学生で再び低下している。 ・「京女高」「指定校A」「一般後期」「指定校C」「公募制推薦」入学学生成績は低下傾向にあり、全学データを下回るものもある。	低下傾向が見られる入試区分が、特に秋入試に集中している傾向がある。	・令和6年度入試合格者に対して入学前課題を質的・量的に大きな改善を実施した。その結果を検証し、入学前課題をさらに検討する必要がある。 ・2023年度に実施した学科FD研修（低学力学生に対する教育）を継続し、更に研修を重ね、授業等での指導を改善する。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、令和9年度に向けてカリキュラム全体の見直しに繋げてください。 ・改善へのアクションについて、「意識を持つ」にとどまらず、具体的な行動を新年度当初より実行し、エビデンスを蓄積していってください。 ・授業改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。
英文	新たな点検項目であるシラバス参考度や理解度、授業形態の妥当性、開講学年は適切かという項目はすべて8割前後が好意的な評価をしている。授業の難易度の項目では「どちらでもない」という割合が経年で見てもやや高い。逆に目標達成の評価は過去3年と比べて若干低い値を示している。	目標達成がやや低い点は課題である。また授業形態も経年で比較することはできないが、その妥当性は十分明らかにはなっていない。	目標を達成できるように、シラバス作成時に適切に計画し、それに向けて授業の実施においても十分注意が払われるよう、学科の専任教員、及び非常勤教員に周知徹底する。また授業形態の妥当性についても検討する。	すべての項目で全体の平均にほぼ近い値であった。しかし資料の適切性、教員の説明、授業形態、目標達成の項目においては、わずかに平均を下回っている。また一方で平均よりも大幅に高い値を示す項目もなかった。	平均を下回った左記の4つの項目で、3つはほんのわずかに低いだけであったが、資料の適切性は0.5ポイント低く、この点は課題として認識すべきと思われる。	適切な資料を的確に使用するよう学科の教員に求めていく。またその他の項目もほぼ平均値であるので、全体的にさらなる努力を促していく。	総合型選抜や共通テスト、京女高の2023年入学者の最新累積GPAは、それぞれ3,524、3,445、3,114と、過去3年と比べてもかなり高かった。一方で指定校入試や公募制推薦による2023年入学者の累積GPAは軒並み3,0を下回っており、経年で見ても下降傾向にある。一般入試による入学者の成績は年度によってばらつきがあり、現段階ではなんとも言えない。	指定校入試や公募制推薦による入学者の成績が下降傾向にある点は課題である。また一般入試による入学者も、GPAだけでは判断できないが、実際の英語力は、志願者が減少していることから考えても、下降気味であるかもしれない。	入学前教育でしっかりと英語の基礎的知識を復習できるような課題を出し、入学後に英語力が一定水準以下の学生に対して、リメディアルの授業を実施することが必要と思われる。また現在も行っている成績下位の学生に対する面談を、より丁寧に行っていく。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、令和７年度からの新カリキュラムおよび4月からの入試広報に反映してください。 ・リメディアル教育についてR6年度より具体的な取組みを始め、エビデンスに基づいて検証してください。 ・授業改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。
史学	すべての項目についておおむね良好な評価を得られている。また、経年変化の特徴としては、毎年前期にやや評価が下がるものの、後期には前年を上回る値となることが指摘できる。その結果、ほとんどの設問について、年を経るごとに評価が高まっていくという傾向がみられる。	設問３（受講生の理解度の確認）の評価値は、経年変化としては徐々に高くなってはいるが、2023年前期を除くすべての学期で、他の設問よりも低い値となっている。	各教員が担当科目のアンケート結果のうち理解度確認の評価を再確認し、必要に応じて理解度確認の方法や頻度を改善する。	学科全体の集計値は、総じて全学の値と同等か上回っている。とくに、設問2（教員の説明・話し方）と設問4（フィードバック）の評価の高さが目立つ。設問2は、史学科集計値が全学集計値よりも0.1高く、設問4は全学よりも史学科が0.12高い。他方、史学科の値が全学よりも低い項目は2項目あるが、その差は0.01-0.02とかなり小さい。	設問8（開講時期）の学科集計値は3.09であり、全学集計値3.11よりもわずかではあるが低かった。	今年度策定した令和7年度からの新教育課程において、一部の科目の開講時期を見直した。	半数以上の入試区分で2020-2023年度累積GPAの平均は3.0以上であった。入学者の累積GPAが3.0未満となったのは、低い順に共通テスト後期(2.793)、一般後期(2.805)、総合型選抜(2.960)、一般中期(2.972)である。	総合型選抜と後期選抜による入学者の成績が伸び悩む傾向にある。	後期選抜は、合格から入学までの期間が短いため、合格者に対する入学前の対応は難しい。必要に応じて、入学後に学修支援に取り組む。総合型選抜については、入学前課題の量と質、実施方法などについて引き続き検討し、より良いものにしていく。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、令和9年度に向けてカリキュラム全体の見直しに繋げてください。 ・改善へのアクションについて、検討・確認に終わらず、具体的に改善策を実行し、エビデンスを蓄積していってください。 ・授業改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。
教育	2020年度前期は新型コロナウイルス禍で全面的にオンライン授業が行われていた時期だと言え、この時期の数値が全般的に低い。それ以降は大きな変化はなく、2023年度前期も概ね全般的によい数値で推移していると言える。2019年度のデータがあれば、オンライン授業やLMS、teamsを用いた授業を使うことでどのように学生の回答が変化したかを知ることができると考える。	いずれのデータも良好で、専攻全体として課題はとくにないと考える。	これまで通り、授業の工夫改善を続けていく。	難易度を除くいずれの項目に関しても、全学の平均値と比べて教育学専攻の平均値は高い結果となっている。目標達成、理解度なども平均値ベースで高くなっており、学生の学修への取り組み、意欲が高いこと、教員の教育への意欲が高いことがうかがえる。	とくに課題はないと考えられる。	これまで通り、授業の工夫改善を続けていく。	平均値ベースで見たとき、入試区分ごとの成績には大きな差が見られないという意見が大勢であった。2023年度に関しては総合型選抜の成績が低め、共通テスト後期の平均が高めとなっているが、これはいずれもサンプルが少ないためだと考えられる。また、GPAが低い学生の中には大学に出てきづらい学生がおり、総合型選抜、一般前期、指定校A、公募制推薦などの入学生に比較的どの年度も存在している。教育学専攻では、専攻会議で欠席が続く学生についての情報共有を綿密に行い、教員が手厚く支援をしているが、すぐに解決するものではなく、継続的な支援が必要となっている。	発達教育学部全体の入試状況が厳しい中で、どの入試で入学してきた学生に関しても、手厚いフォローは必要であると考えられる。	高校までは登校が難しかった学生でも、大学での学びに意義を見いだし学修に励んでおり、教育学を研究実践する専門家集団として、学びのあり方についてもきちんと議論対応していく。	・志願者の減少が継続すれば、今後、一層多様な学生の受け入れが見込まれます。具体的にどのような支援が可能かFD等で検討し、伴走支援に繋げてください。 ・改善へのアクションについて、検討・議論に終わらず、具体的に改善策を実行し、エビデンスを蓄積していってください。 ・授業改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。

	前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、経年比較でどのように変化しているか（傾向、学科として望ましい値か等）			前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、全学の集計値と比較してどのような状況か。			入試区分ごとに、成績分布に傾向はあるか。課題に感じる部分があれば、学科として取り得る対策はあるか（例：入学前教育の工夫、入学後のサポート体制等）			改善・向上に向けた内部質保証推進会議からの指示
	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	
音楽	コロナ禍が始まった2020年度前期の数値は全体的に低めだったが、後期の数値は上がったことから、教員はオンライン授業のノウハウを習得し、学生も徐々に新たな授業形態に慣れて、ある程度満足のいく授業を受講できていることが読み取れる。その後の数値は微妙な変動はあるものの、2023年度前期までほぼ同じ水準を保っている。2024年度からの改組によって同じ学科に統合される教育学専攻、児童学科との数値を比較しても大きな差異はないことから、学科として望ましい値と言える。	「目標達成」の数値が、2022年度後期は4.28だったのが、2023年度前期は4.01まで下がっている。	シラバスの「授業の到達目標」をより具体的に分かりやすく記述すること、また各々の授業内で到達目標について随時口頭で丁寧に説明し、学生の学習意欲を喚起させることが必要である。	前期授業アンケート結果の音楽教育学専攻の集計値と全学の集計値を比較すると、全学平均よりもほとんどの項目で平均スコアが高くなっている。ほとんどが４以上であり、開講学年と難易度のみ３点台であるが、他学科他専攻もその項目は３点台であり、とりわけ低いわけではない。	他学科他専攻に比べて特に低いわけではないが、開講学年と難易度のみ３点台となっていることが課題である。	開講学年が適切であるか、難易度がどうか、改めてカリキュラムを確認し、また教員は、学生がきちんと理解しているかどうか確認しながら授業を進めていく必要があるだろう。	入試区分ごとのGPA累積の分布を一見すると「一般中期」（ca.3.5）「指定校A」（ca.3.7）が高く、「一般後期」（ca.3.0）は低いが、年度によって特定の入試区分で入学する学生数には偏りがある。人数のバランスを考慮に入れて俯瞰すると、どの入試区分でも平均して高めのGPA（小数点以下第二位を四捨五入して3.0）をマークしていると考えるのが妥当であろう。強いていうなら「京女高」はGPAが高いと言える。	特別にGPAが低い入試区分はないことから、大きな課題は特にない。ただし、2022年度前期一般と2023年度指定校BのGPA平均値が他学年のよりも低いことは指摘できる。	GPAが高いと言える「京女高」の志願者獲得には力を入れたい。また、現1,2回生にはサポートを必要とする学生もいることに留意し、注視しながら対応していく。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、新学部でのカリキュラム実施・見直しに繋げてください。 ・改善へのアクションについて、検討・確認に終わらず、具体的に改善策を実行し、エビデンスを蓄積していってください。 ・授業改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。
児童	集計結果の「経年」グラフを見ると、2020年度前期との比較では高い値ではあるが、2022年度前期とは同様、また2021年度前期の結果と比較すると、全体的に低い結果となっている。 教員の説明や資料、そして理解度については、概ね良好ではあるが、目標達成度 について「非常にそう思う」が低く、「どちらでもない」の値が高くなっており、全体からみても「非常にそう思う」の値が低くなっている。	目標達成について、学生および教員の意識を高める必要性がある。 また、フィードバックについての徹底も必要である。	目標達成について、シラバスの参考度や理解度は必要であるため、新年度に向けた各学年のオリエンテーションおよび各授業において学生に徹底周知していく。	全体的には全体集計値と近い結果となっている。しかし、資料や教員の説明、理解度、また特にフィードバックに関する項目では、「非常にそう思う」という回答率が全体集計値の回答率に比べて低い。開講学年、難易度などは良好であるのに比べ、授業形態の妥当性に「全く思わない」という回答が全体集計値の回答率に比べて多いことや、シラバス参考度および理解度に「どちらでもない」という回答が多い。	シラバス参考度および理解度について、「非常にそう思う」「そう思う」の回答率が高くなるよう、各教員による徹底が必要である。また、授業形態についても、授業内容に応じた妥当性のあるものか検討の必要がある。	シラバス参考度および理解度については、「非常にそう思う」「そう思う」の回答率が高くなるよう、新年度に向けた各学年のオリエンテーション等で学生に徹底周知していく。授業形態の妥当性については、学科の特性上、対面による授業を希望する学生も多いことが考えられるため、オンライン・オンデマンドによる授業の見直しについて、学科会議等で慎重に進めていく。	一般入試での累積GPAの値が低い。特に一般後期での成績分布が低い。逆に指定校は比較的高い値となっており、特に指定校Bの累積GPAの値が高くなっている。公募制推薦についても比較的安定して高い。2022年度について、公募制推薦や総合型入試の累積GPAが落ちている。	新発達教育学部として、一般入試での確保をどのようにしていくか。	新学部としてどのようにしていくかを考える必要があるため、教育学科との連携を図りながら対策を考える。特に、幼・保・小・中・高また音楽と選択も多岐に渡るため、入試による傾向のばらつきをなくしていくための入学後のサポート体制の強化を話し合う。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、新学部でのカリキュラム実施・見直しに繋げてください。 ・改善へのアクションについて、検討・議論に終わらず、具体的に改善策を実行し、エビデンスを蓄積していってください。 ・授業改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。
養福	資料、教員説明、理解度、フィードバック、目標設定はおおむね「４」前後を推移している。難易度に関しては、他の項目と比較して低率であり、経年変化でも最低値となっている。2023年度の学年平均をみると４年生は2.53とその中でも低率であることがわかる。	４年生科目の内容、特に卒論指導の充実が必要である。	研究法Ⅰ・Ⅱの卒論指導、 養護関係では、教職実践演習・養護教育実習・教育実習、 福祉関係では、ソーシャルワーク実習指導・ソーシャルワーク実習・スクールソーシャルワーク実習指導・スクールソーシャルワーク実習が４年生の科目であるので、その科目の中で課題の出し方を検討する。	資料、教員説明、理解度、フィードバック、シラバス参考、シラバス理解、授業形態、難易度、目標達成の項目は全学の集計値と比較しても同じような傾向がみられたが、教育学科の他の専攻（教育学専攻・音楽教育学専攻）と比較すると低値であった。	どの項目も教育学科の他の専攻と比較して低値であったことが課題である。	どの項目も教育学科の他の専攻と比較して低値であったことを養護・福祉教育学専攻の教員で共通理解をして、来年度に臨みたいと考える。	2022年度入学生と2023年度入学生の累積GPAを比較すると、一般後期以外は2023年度入学生の方が累積GPAが高く、学力的にも落ち着いている状況がみられる。2022年度は専攻の定員60名を大きく超えて87名が入学してきたが、今までにないような学生の多様性を感じている。2023年度入学生では、指定校Aで入学してきた学生の累積GPAが大きく開きがあり、人数だけの問題でもないのかも知れない。	学生の人数が多いということは、学修面で困難さを感じる学生が増えるということが証明された。今後、よりていねいな指導・支援が求められる。また、入学前教育の工夫や入学後の先輩によるピアサポート制度などの導入が必要である。	日頃から、専攻会議で教員が気になっている学生の動向を情報交換して共通理解をしているが、さらにその充実が必要である。また、新学部では先輩によるピアサポート制度についても実施していく。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、新学部でのカリキュラム実施・見直しに繋げてください。 ・改善へのアクションについて、検討・確認に終わらず、具体的に改善策を実行し、エビデンスを蓄積していってください。 ・授業改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。

	前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、経年比較でどのように変化しているか（傾向、学科として望ましい値か等）			前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、全学の集計値と比較してどのような状況か。			入試区分ごとに、成績分布に傾向はあるか。課題に感じる部分があれば、学科として取り得る対策はあるか（例：入学前教育の工夫、入学後のサポート体制等）			改善・向上に向けた内部質保証推進会議からの指示
	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	
心理	授業アンケート結果を2020前期と2023年前期を比較してみると、「資料」の項目では変化がないが、それ以外の項目では向上している。「教員説明」の項目では、2020年度から2021年度へ向上しており、2023年前期もそれを維持している。「フィードバック」の項目では、2020年度から2023年前期へと徐々に向上している。「理解度」についても過去の年度の前期と比較すると徐々に向上している。なお、資料の2021通年と2022年通年のデータは回答数が少ないため対象外とした。	心理学科の授業アンケートの結果は徐々に改善されつつあるが、この変化を維持する必要がある。ただ、「資料」については変化が認められず、何らかの対応が必要である。	FD等において、授業で使用する資料・テキストの内容の適切性について教員間で評価する。	心理学科の集計値を全学の集計値と比較すると、ほとんどの項目において全学の集計値とほぼ同じか低い値であった。ただ、他の学科と比較して、学年進行に伴った集計値の向上が顕著であり、少人数教育が効果的に機能している可能性を示唆するものである。	心理学科の授業アンケートの結果は全学の集計値と比較して必ずしも良好なものとはいえないが、徐々に改善されつつあることは、モニタリング項目No.1においても述べた通りである。	引き続き、入門段階の授業をターゲットにして、授業方法の点検を各教員が行う必要がある。	2020年度から2021年度の入学生の入試区分ごとの成績分布では、入試区分によって入学後のGPAにばらつきが認められた。具体的には、総合型選抜や指定校推薦（京女高推薦を含む）で入学した学生のGPAが低かった。しかし、2022年度、2023年度入学生においては、入学後の成績に入試制度によるばらつきが認められず、どの入試制度においても入学後の成績が良好である。	入試制度による入学後の成績のばらつきが無くなったことは好ましいことではあるが、その原因について精査する必要がある。原因を明らかにすることによって、次へのアクションを決定することができる。	原因を精査するためのアンケート実施を検討する。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、新学部でのカリキュラム実施・見直しに繋げてください。 ・授業改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。
食物	授業アンケートの質問項目の推移に関して、全般的に21年後期、あるいは22年前期をピークに22年後期にかけて低下傾向にあった。しかし、22年後期から23年前期においては上昇傾向に転じている。目標達成項目については、21年後期をピークとして、以降、23年前期にかけて低下傾向が続いている。難易度ポイントについては、年々低下傾向にある。	難易度ポイントに関して、年々低下傾向にある点は、各教員の創意工夫によるためであるのかの検証は必要である。目標達成のポイントの低下に関しては、今後の大きな課題であり、今後、注視していきたい。	学科内での情報共有および検証を行う。さらに目標達成のポイント低下に関しては、再度、各授業内においてシラバスなどを掲示し各授業、また各時間や各テーマにおける到達目標を示す。更に到達状況の評価のために小テスト、レポートなどを行ない、学生へのフィードバックにより学生自身が自身の到達度を常に確認できるようにする。このような授業をすすめていく中で、今後の目標達成ポイントの推移を見ていきたい。	理解度、フィードバックは、全体平均より0.16～0.18ポイント下回り、難易度は0.13ポイント上回っていたが、総じて全学平均と同等と考えられる。	今後の課題としては、理解度、フィードバック、難易度の各項目についての検証といえる。	学科内での情報共有を行なう。また、理解度、フィードバックに関しては、到達目標ポイントの低下の課題とともに検討する必要がある。各授業、各時間などで到達目標を示す。到達状況評価のための小テスト等の実施。更に学生へのフィードバックと学生自身の到達度の確認ができる体制が必要である。以上の実施により、各ポイントの今後の推移を見ていきたい。	2023年度の結果では総合型選抜、共通テスト（後期）、指定校A 、一般前期の順に累積GPAは高い。特に総合型選抜に関しては2020年以降上昇傾向にある。指定校A、一般前期については2020～2022年には低下傾向にあったが、2023年度に上昇に転じている。公募制推薦については毎年ほぼ横ばいである。いずれも年によるばらつきがあり、経年的な推移を見ていく必要があると言えるが、総じて、入試区分による差異は小さくなっていると考えられる。	受験生の傾向が年内受験に移行していると言われる中では、受験区分別のGPAの推移を継続して確認し、学科内での情報共有が重要である。	入試区分による差異は小さくなっているとはいえ、総合型、指定校などの学生に対しては、入学までの期間、入学後の対応はこれまで同様に行う。特に本学科においては、国家試験に向けての対策は重要であり、授業アンケート、あるいは国家試験における合格率などをもとに、学科内での対応を検証し次年度の対策へとつなげていく。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、改善・向上施策を具体化してください。 ・改善へのアクションについて、検討・確認に終わらず、具体的に改善策を実行し、エビデンスを蓄積していってください。 ・授業改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。
造形	経年変化のデータが存在する６項目において、経年７回のアンケート平均値が4.0を超えるのは「資料」「教員説明」「目標達成」の３項目であり、この３項目については経年変化で見ても毎回高い評価を得ている。ただし2020年度前期（コロナ対応初期）においては３項目とも4.0を下回っており、当時はコロナ対応が十分にできていなかったことがわかる。平均で見ても経年変化で見ても4.0を下回るのは「理解度」である。ただし評価の低さは、授業の一部がオンラインであったことと関係する可能性もある。 「フィードバック」については、７回のアンケートの平均値で見ると4.0を下回るものの、2020年度前期以降だんだん評価が高くなっている。その要因としてもちろん個々の教員の努力もあるが、背景にFD研修の成果もあると推測する。 学生が感じる「難易度」については、７回のアンケート平均で3.62、経年変化で見るとだんだん下がっている（＝難しいと感じない学生が増えている）。各授業内容に大きな変更がないことを前提とすれば、「フィードバック」への評価が上がっていることと関連していると推測する。	オンライン授業では、「授業は受講生の理解度を確認しながら進められていたか」という質問に対し、「どちらでもない」と回答した学生が少なからずいたため評価が低くなった面もあると思われる。2024年度より原則対面授業となる中で、「理解度」の項目への評価がどれだけ回復するかを注視したい。また、入学する学生の偏差値が年々下がっているため、同じような指導では評価は下がっていくことが容易に想像できる。そのためより一層の工夫が必要である。	「資料」「教員説明」「目標達成」への評価は高いことから、現状としては「教員は努力している」と言えるものの、入学生の変質に対応する柔軟性も必要で、それが今後の評価につながると思われる。そのためにもカリキュラム改革を含む将来構想の検討を間断なく行い、教育に対する教員のモチベーションを保つ工夫が必要と考える。	全学平均と比較して評価が上回っている項目は、８項目（10項目中開講学年・難易度除く）のうち「資料」「教員説明」「フィードバック」「シラバス参考」「シラバス理解」「授業形態」「目標達成」の７項目であった。ただしその差はごく僅かであった。同様に、下回った「理解度」についてもその差はごく僅かであった。 また「理解度」以外の項目については、75%以上の学生が４～５の評価であり、１～２のネガティブな評価（「そう思わない」「全くそう思わない」）を選択している学生は合わせて４％未満であった。ただし、「理解度」についてもネガティブな評価を行ったのは5.48%であり、一部の授業に限られていることがわかる。	「理解度」の項目について、ネガティブな評価は一部の授業とは言え、上述のように入学生の偏差値が年々下がる中で学生の理解度を見極めることは授業を進めるうえで重要と思われる。そのため、学科全体としても「理解度」への評価を改善する工夫が必要と思われる。	全学平均との比較については、評価している学生が異なるため（単に生活造形の学生の評価が他学科の学生よりやや甘いという可能性もある）、平均値を上回っていると言っても一喜一憂はできない。引き続き工夫・改善努力を行っていく必要がある。 「理解度」については、教員間でも情報共有しながら改善工夫を行なっていく必要がある。	2023年入学生については前期のモニタリングシートでの分析から、「一般前期」と「公募推薦」での入学者の高校ランクが高く「指定校」が低いと言う結果であったが、前期GPAについては、平均値が高かったのは「公募推薦」、次いで「総合型選抜」、以下「指定校B」、「一般前期」、「京女高」、「共通テスト」、「一般後期」、「指定校A」という順であった。 「指定校A」については経年で見ても常に低く、もともと高校ランクが低いことが原因と思われる。 「一般前期」については入学後の成績が両極化しており、一部の学生の入学後の意欲の低下が懸念される。	高校ランク・GPAのどちらも平均値が低い「指定校A」での入学の学生には、入学前・入学後のサポートが必要だと思われる。 一方で、高校ランクは高かったにもかかわらずGPAを下げている一部の学生に対しては、知的興味を引き出すレベルの授業が提供できていない可能性があり、授業単位での検証が必要である。	学生の学力差が広がりつつあるなかで、どちらの層にも目配りする必要がある。特に、優秀な学生にはプロジェクトやゼミ活動（先輩の研究・活動を手伝う）等への参加を促すことで興味を引き出すといった等の工夫・検討をおこなう。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、FD等において改善・向上施策を実施してください。 ・授業改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。

	前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、経年比較でどのように変化しているか（傾向、学科として望ましい値か等）			前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、全学の集計値と比較してどのような状況か。			入試区分ごとに、成績分布に傾向はあるか。課題に感じる部分があれば、学科として取り得る対策はあるか（例：入学前教育の工夫、入学後のサポート体制等）			改善・向上に向けた内部質保証推進会議からの指示
	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	
現社	2020～2023年度前期までの経年の変化について、新型コロナウイルス流行初期である2020年度前期を考慮の外におけば、各項目ともに大きな変化は見られない。なお、2023年度前期は、「資料の分かりやすさ」や「理解度」、また「フィードバック」を問う各項目で、2020年度以来の最高値となっている。	4点をひとまずの基準と考えるならば、2023年度前期の時点で未達成なのは、「理解度」と「目標達成」である。	この結果を学科で共有し、改善に向けて各授業レベルでの工夫を行う。	おおむね全学平均に近似する結果が出ている。全学平均と0.1ポイント以上の乖離があるのは、授業の難易度を問うQ10だけであった（全学3.37, 現社3.50）。全学に比較して、授業がやや難しいと捉える学生が多かったということだが、この数値自体に問題があるとは直ちに言えない。	資料の分かりやすさ、教員の説明の分かりやすさ、理解度が、全学と比較し、わずかであるが低い。	この結果を学科で共有し、改善に向けて各授業レベルでの工夫を行う。	2020～2023年の４年間の累積のGPA平均値をみると、総合型選抜（2.931）と京女高（2.973）の数値が２点台でやや低い。ただしいずれも、特定の年度（総合型：2021年2.592、京女高2021年2.734）が平均値を押し下げていて、2023年度については総合型3.160、京女高3.143と問題のある数値ではない。また共通テスト利用（前期）の2023年度の数値が2.500と低いが、2020～2022年度は一貫して高く、また当該年度の入学者数が少ない（３人）ため、低下傾向にあるとは判断できない。なお公募型推薦が一貫して高めの数値となっていることは特筆すべきである。	年内入試での入学者が増加することが見込まれる。	多様な入学者の増加に対し、引き続き動向を注視しながら、適時、対応策を検討していく。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、改善・向上施策を具体化してください。 ・授業レベルの改善への取り組みを組織的に共有し、エビデンスを蓄積していってください。 ・授業改善への取り組みにあたって、インタビュー等できるだけ学生の視点を取り入れてください。
法学	資料、教員説明、理解度、フィードバックは2020年度前期から比べると、数値が上がっている。途中年度ではもっと高い数値が出ているが、全体として高止まりの傾向である。前期は後期と比べ毎年度数値がやや低い。おそらく、年度はじめで、学生特に新入生が、授業において右往左往していることが原因と思われる。	毎学期の経年比較ができるので、特に悪化した学期について発見しやすい。その場合、特別な悪化要因を見出せるだろう。しかし、新たな挑戦に結びつく要因の発見はできないと考えられる。	1回生前期のアンケート結果が後期と比べて低い理由を、教員での会議を通して検討する。FD活動などの機会に、学生との対話を設けて、授業改善の提案などを直接聞いて、教員間で情報共有する手段があり得る。	資料の分かりやすさ、教員説明の分かりやすさ、フィードバックの良さ、シラバス達成度について、「そう思う」「非常にそう思う」が全学の集計と５パーセント以内で、法学科は低い。しかし、有意な差はないと思う。シラバス参考度は、法学科が全学よりやや数値が高い。	あえて言うなら、フィードバックの良さと、シラバス達成度を向上させることである。他方、教員説明の分かりやすさは主観的な感じ方の側面が強いように思う。	フィードバックの良さと、シラバス達成度を向上させるには、前項目と同様に授業改善のFD活動などの機会に、学生との対話を設けて、授業改善の提案などを直接聞いて、教員間で情報共有する手段があり得る。	「入試区分別累積GPA分布（2020～2022年度入学）」によれば、入学年度、入試制度ごと多少の差はみられるが、全学的な平均値と大きな差（±0.2ポイントの範囲内）はみられない。例年、全学平均値を大きく上回っているのが、「総合型選抜入試」（2020～2022年度入学）であり、早期に合格を果たし、入学前教育プログラムの受講およびその他の課題を通じた学習により、大学入学までの間に、大学での学びへとつなげる準備ができているものと思われる。	・「入試区分別累積GPA分布（2023年度入学）」によれば、いずれの入試制度においても全学的な平均値を大きく下回っている。その中でも公募制推薦、京女高では、1.188ポイント、総合型選抜では、1.134ポイントも下回っている。 ・「入試区分別累積GPA分布（2020～2022年度入学）」によれば、全学平均値と大きな差は見られないが、一般前期、指定校A・Bで、0.6ポイント程度下回っている。	・広報活動を通じて、法学部の魅力を受験生等に伝えていくことが必要である。 ・現行の入学前教育で一定の成果をあげているものと考えられるが、今後、受験生のレベル等に合わせて見直すことも必要である。 ・入学後の「らしつよサポートプログラム」（伴走支援）を通じて、高校の学びから大学への学びをサポートしていくことが必要である。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、FD等において改善・向上施策を実施してください。 ・授業改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。
DS				DS学部の各回答項目の平均値は3.6~3.9点程度であり，項目で言うと「どちらでもない」と「そう思う」の「そう思う」よりの位置であった．講義内容や対象が異なるため学科間の比較は慎重に解釈する必要があるが，各項目の平均値をDS学部と全学集計の間で比較すると，資料，説明，フィードバック，理解度，目標達成などの項目でDSの平均値は3.7～3.9点であり，全学平均の3.9~4.1点に比べ約0.1～0.4点低かった．フィードバックは全学に比べ0.1点程度の差であり，相対的に良い評価であった．一方，難易度は全学に比べ0.07点高かった．DS学部は文理融合学部であり，文系学生は理系科目に，理系学生は文系科目に難しさを感じていると考えられた．	DS学部は文理融合学部であり，文系学生は理系科目に，理系学生は文系科目に難しさを感じていると考えられる．他学部に比べ，相対的に難易度が高いと回答していることが根拠である．1回生では，将来の専門科目の学習のために，基礎科目をしっかり学習できるような環境整備が必要である．	学科会議や学科内のFD研修会において，今回の結果を教員間で共有し議論する．文理融合学部では，文系学生への理系科目の教育と，理系学生への文系科目の教育の最適な方法の探索が極めて重要である．難易度が高いと学生が感じている科目について，教員間でよく議論しよりよい教育方法を探索する．	DS学部における入試区分ごとの累積GPAの平均点は，3.51～3.75点であり，入試区分により大きな差はみられず全区分において高値であった．平均値のみでなく，全区分で分布の25%点が3.0を超えていた．なお，主に面接により選抜された総合型選抜の学生の平均も3.68点であり高値であった．ただし，今回は1回生前期のみの成績であるため，1回生後期や2回生の成績を用いた継続的な区分間の比較が必要である．また，平均値による評価と並行してGPAが低値である個別の学生に対する対策も考える必要がある．	入試区分によって，累積GPAの分布に大きな差はみられなかった．今後の1回生後期以降の成績を用いた更なる評価が必要である．1回生前期の累積GPAが2.0付近の学生に対しては対策が必要である．	学科会議や学科内のFD研修会において，今回の結果を教員間で共有し議論する．1回生前期の累積GPAが2.0付近の学生に対しては，DS学部のアカデミックカウンセリングにおける面談に加え，成績不振者に対する面談により学生から状況を聞き対策を考える計画である．	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、FD等において改善・向上施策を実施してください。 ・授業およびカリキュラム改善への取り組みにあたって、できるだけ学生の視点を取り入れてください。